

Title	<大會抄録>イラン生活文化史への一視点：ペルシア語の農業書をめぐって
Author(s)	清水, 宏祐
Citation	東洋史研究 (1982), 41(3): 602-602
Issue Date	1982-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153866
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

建國時の事情に根ざすイル汗國の分立的體質は、外敵の侵入を撃退した後、汗位繼承争いと絡む有力アミール間の政争という形で表面化し、十數年間の混亂状態が續いたが、フラグの曾孫ガーザーンは一連の政争の中心にあつた西方出先機關起源の軍隊の支配者その他の有力アミール達、彼等と結託して汗位を狙ひうる諸王達を徹底的に討つて子飼いのアミール達を中核とする統一政權を成立させた。

ガーザーン汗の歿後、彼の弟オルジャイト、その息子アブー・サイードへと汗位は移行し、彼等と姻戚關係にあるアミール達を中核にイル汗國は一應の安定をみていたが、ガーザーン汗の歿後三十年、フラグ家の正統が斷絶して諸勢力分立抗争の状態となり、事實上解體した。

イラン生活文化史への一視點

——ペルシア語の農業書をめぐって——

清水 宏 祐

サファヴィー朝時代に書かれた 'Ishād al-Zirā'a 「農業便覧」は、土壤の選定、種まきから説きおこし、八十餘種にのぼる野菜、果物を、その品種、銘柄ごとに特徴を分類し、さらに養蜂やチーズの作り方にまで及ぶ、まさに「種まきから口に入れるまで」を記述した體系的な農業書である。さらに本書には、イラン太陽暦の元旦（ノウ・ルーズ）が何曜日に始まるかによつて、その年の農事の吉凶を占う方法や、アラビア語の祈りの文句を紙に書き、棒の先に附けて

耕地の四隅に立てる豐作祈願の儀式など、現代の農村調査の報告書におけるような、生き生きとした描寫が見られ、當時の生活文化を考える上での恰好の材料を提供してくれる。この農業書を紹介しながら、その中に流れているギリシア起源の發想法や、アラビア語の農書からの影響について觸れるとともに、その背景となっているイランの自然條件の特殊性についても考えてみたい。

イブン・ファッラーとイブン・タイミーヤ

——中世のハンバリー派政治思想の展開——

湯川 武

スンニー派イスラームの法學の分野には、いずれも正統的と認められている四つの大きな法學派がある。四大法學派の中では、ハンバリー派はその祖とされるイブン・ハンバル以來、強烈な傳統主義的な立場、あるいは、いわゆる原則主義的な立場で知られている。

イスラームの學問體系にあつては、政治に關する議論は法學の一分野となつてゐる。したがつて、ハンバリー派にはハンバリー派獨自の政治論が存在していた。それは、先に述べたような同派の立場を反映して、イスラーム法をより嚴格に解釋し、それを社會で實施していくことが政治の目的である、ということを強く押し出している。とは言つても、ハンバリー派の政治論が歴史的に變化、展開してこなかつたというわけではない。むしろ、かなり重要な點で變化があつたことは明らかである。